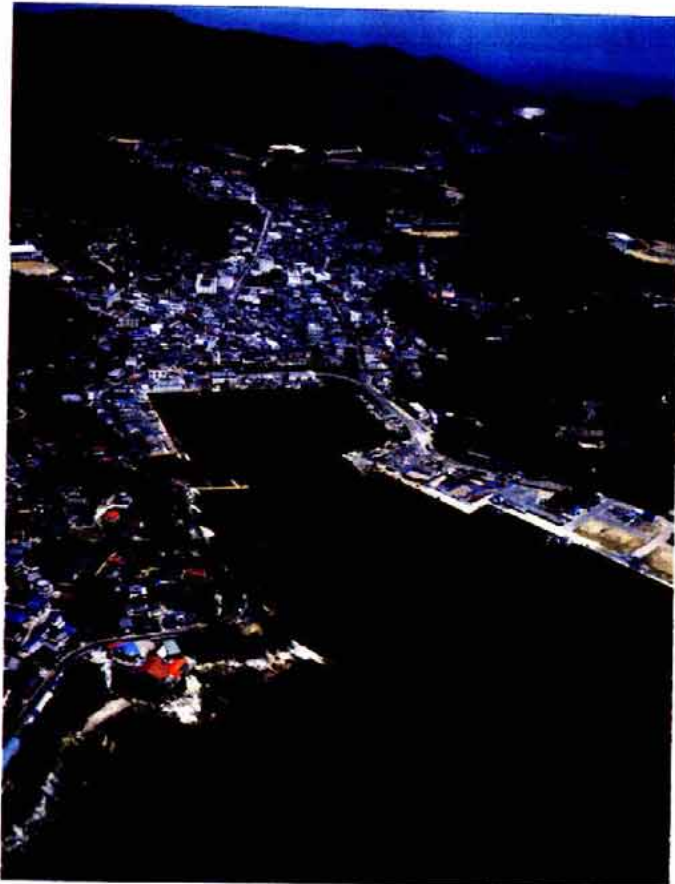


にぎわい

—日本海にぎわい・交流海道推進協議会通信—

厳原港（重要港湾）



（厳原港）

対馬は、日本第4位の広さを有する島であり、福岡まで147kmに比べ韓国までは49.5kmと非常に近い。肉眼で外国を見ることができるのは北海道の一部と対馬だけであり、まさに国境の島である。このため温か平安のころより大陸との交易を行い、特に江戸時代の鎖国制度の中にあつて長崎の出島と並び、外国との窓口を開いていたのが対馬藩宗家10万石である。特記すべきことは、鎖国時代に釜山市内の一角に「倭館」とよばれる専用駐在地の設置が許

され、出島の25倍を有する敷地に常時600名程度の対馬人が滞在し交易を行っていた。

生産力の低い対馬にとっては朝鮮貿易はまさに生命線であり悠久の昔から現在まで厳原港は要衝としての位置を保っている。



（厳原港付近の漁火）

朝鮮通信使



●朝鮮通信使絵巻・部分 紙本墨彩 制作年不詳 長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵
これは部分であるが、本来は全長16.58m、幅27cmの巻物である

豊臣秀吉の朝鮮侵略以来、断絶していた李王朝との交流は、対馬藩の懸命の努力が実りようやく回復し、慶長12年（1607年）から文化8年（1811年）までの204年間に12回の通信使が海を渡っている。一行は国書を携えた正使以下400～500名で組織され、多くは

学者、文人等であり、まさに一大文化使節団であった。その行程は、瀬戸内海を經由し大阪までは海路、大阪から日光までは陸路を利用し、往復に6ヶ月以上の日数を要した。対馬藩主は幕府の命により交渉、警護の大任を任され、終始一行に随行している。また、国内の学者、文化人は一行との交流を「終身の栄」とし、民衆は異国の文化にふれようと沿道に溢れたと示されている。

この偉大な歴史は、国内ではほとんど認知されていない。それは、近代日本が辿った不幸な政策の中で、対等な日韓関係を闇に葬った為である。



お船江跡

海に生きた宗氏の隆盛を物語る遺構に、対馬藩お船江跡がある。藩の御用船に係留するため、厳原港南方の久田川河口に5基のお船江と呼ばれるドックができたのは、寛文3年（1663年）現在より330年ほど前である。築堤の石積みは当時の原形を保ち、正門、倉庫、藩主休息



の建物などが残されている。江戸時代、海辺の藩はこうした船江を設けていたが、厳原のように原形をよくとどめているところは、他に例がない。

厳原港まつり・対馬アリラン祭

対馬歴代藩主の功績を偲ぶと共に、観光振興を目的として、毎年8月の第1土曜～日曜の2日間にかけて開催される。まつりのメインイベントは「朝鮮通信使行列」であり当時の模様が忠実に再現している。この行列には島民はもとより島外の観光客、ホームステイ中の韓国の学生、韓国舞踊



（お舟様）



（舟グロー）

団もチョゴリと呼ばれる衣装を整え参加する。その他には11丁櫓の和船レースの舟グロー、厳原港メイン会場での演芸、フィナーレを飾る花火大会等、夏の一大イベントとして定着している。



編集後記

7月に人事異動の辞令を受けてから2ヶ月たったある日の午後、四建から「にぎわい」のツーシンシの発行についての問い合わせがありました。訳がわからないまま内容を聞くと次のとおりでした。

*「にぎわい」という機関紙があること

*9月号の執筆担当は厳原町であること e t c

こりゃあ大変と、無い知恵をさんざん絞ったあげく、これはもう自分の町の紹介しかない。幸いなことに厳原町は太古の昔から大陸に通じる海道の重要な位置にセットされているじゃあないか。うんうん、これで行こう、という結論に達した次第です。そんな訳で厳原町の海に関する事を掲載しました。興味を持っていただければ嬉しく思います。

なお、発行が遅れたことを心からお詫び申し上げます。



(対馬最南端「豆殻崎」)



(対馬の古い作業舟「藻刈舟」)